巻頭特集インタビュー

「常に新しい感動を求めて 石と向かい合う」

彫刻家・画家 武藤順九

世界で活躍する武藤順九氏（京都のアトリエにて、編集部撮影）

〝美の女神〟に恋をして

――世界で活躍されていて、普段はイタリアで生活（創作）されていらっしゃるのですね。

武藤　いまは日本が少し長くなりましたけど、もう四十六年イタリアで暮らしています。いままでは日本で展覧会などがあるときにひょっこり帰ってきていたんですが、最近は京都のアトリエにいることも多くなりましたよ。

――どうして彫刻家になったのですか？

武藤　そう聞かれると困っちゃうけど、やっぱりつくりたかったんでしょうね。私は絵も描くし、墨絵もやりますし、あとは「石彩（せきさい）」と呼んでいますが、石に絵を描くという私だけのジャンルがあってね。うん、いろいろなことをやりながら遊んでいるんです（笑）。

だから、特別に「彫刻家」という〝職業意識〟を持っているわけではありません。石を彫ったり、キャンバスや石に絵を描いて、自分の表現したいものをつくり続けているだけです。

日本人は「彫刻家」や「画家」といって、みんなジャンル分けしてしまいますね。彫刻でも現代的とか伝統的とか。でもそういうのは皆さんの勝手で、私は「自分が何を表現したいか」ということを追ってきました。その素材がときには石になり、ときにはキャンバスに絵を描いたり。まあ、何にでも描いちゃうんだよな。恥もいっぱいかくしね（笑）。

でもそれが、私の基本的姿勢なんだな。職業があって、その職業を選んだというのではなくて、芸術に恋をしちゃったんだね。

一人の男性が一人の女性に恋をするのと一緒で、いつの間にか〝美の女神〟に恋をした（笑）。

カラー口絵8～11頁に「昭島・昭和の森　武藤順九彫刻園」を掲載しています。あわせてご覧ください！

たまたまそれが職業になったというだけで、それを皆さんが「芸術家」とか、「彫刻家」「絵描き」と呼んでいるけど、私からするとそんなことはあまり関係ないことだな。

――大学は東京藝術大学へ進まれましたが、少年期からつくることが好きだったんですか？

武藤　そうですね。やっぱり芸術が好きだったんです。でも、どういうジャンルを選択するかというのは、自分でもまだその時点では全然わかっていませんでしたね。

作品「シリーズ／記憶の一片　ー太古の空ー」
（H.23×L.28×S.2㎝、2003年、石彩作品）

私が卒業したのは東京藝術大学の美術学部工芸科で、工芸というのは、いわゆるクラフトデザインとか、インダストリアルデザインなどを含み、染織（せんしょく）や彫金（ちょうきん）、陶芸などを学びました。いま考えると、それはとてもラッキーでしたね。なぜなら、インダストリアルデザインのモデルづくりなど、立体的な表現を学び、またポスターなどの平面デザインも学べたからです。

立体・平面を関係なく学んだというのは、今日、彫刻をつくったり、絵を描いたりする一番の基礎を学んだといえます。別にデザイナーになるつもりはなかったんだけどね（笑）。

そして大学を卒業して就職しようというときに、「本当にオレはこれでいいのだろうか」と、自分に対する疑問が生まれたんだな。どこかの会社のデザイナーになれば、お給料をもらえて生活は安定するけれど、「もっと冒険したい」という自分自身の原点に対する渇望（かつぼう）ですね。

だからもう、そのときには〝美の女神〟に恋をしていたんだろうね。それで「もっと美を追求したい」と考え、大学を卒業してすぐにヨーロッパへ渡り、パリ、スペイン、そして最後にはイタリアのローマに落ち着いて、もう四十六年になりますね。

ピエトラサンタで恋人＝大理石と出会う

――ヨーロッパに渡ったのは、彫刻を学ぶのが目的ですか？

武藤　学ぶというよりも、好きなことを目指して、ということですね。でも生活がかかっているから、やっぱり自分でつくったものを売っていかないかんからなぁ。それは辛いときもいっぱいありましたよ。それで自分自身に「どうすれば生きていけるか」と問い続けて、「いいものをつくらなければいけない」ということが切実にわかったんですね。

日本であれば大学のコネクションとか、学校に就職するとか、どこかの美術団体に所属するとか、そういうつながりもありますが、私は全部捨ててしまったからね。東京藝大を出ても、そんなことはヨーロッパでは通用しない。苦しくても、お金を借りられる人もいない（笑）。

だから、二十三歳でヨーロッパに渡ってはじめて裸の自分を見ましたね。そこからが私の本当の冒険。それは戦いでした。

――当時は何をつくられていたんですか？

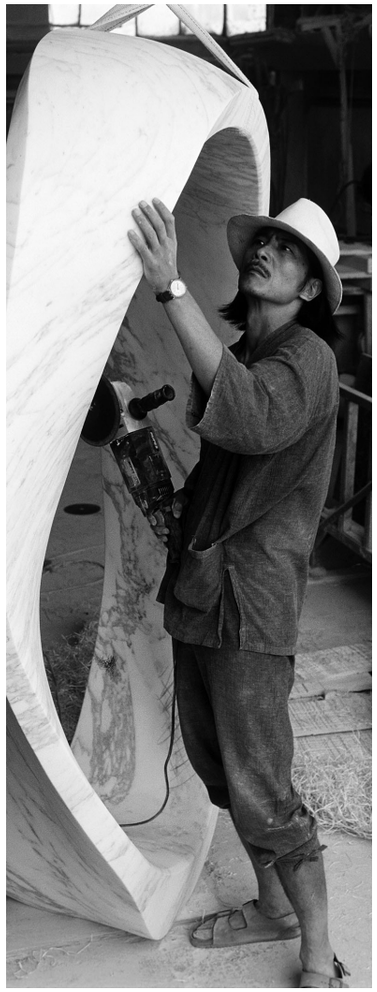
武藤　最初は絵を描いていましたね。食べていくために肖像画を描いたり、墨絵を描けたから風景や人物を描いて、それはよく売れました。

そのうちに段々と生活も落ち着いてきて、少しは経済的な余裕もできたので、ずっとつくりたかった彫刻、それも石を彫ろうと。

きっかけは、あるときにイタリアを旅していて、いまは私の工房もありますが、ピエトラサンタへ行ったんです。世界的に有名な大理石の産地で、彫刻の街ですね。そこでミケランジェロが自ら石を選んだといわれる大理石の採石場にあがったときに、それはもう感動しましてね。「よし、オレもここでやろう」「大理石の彫刻をつくろう」と決意したんです。

――どんな感動がありましたか？

武藤　恋人に会ったような感じだな。うん、そういう表現がわかりやすいでしょう（笑）。「この子いいな」と思える女性にやっとめぐり会えた。そういう感覚でしたね。



写真提供：一般社団法人「風の環」
※編集部撮影のもの以外

武藤順九（むとう じゅんきゅう）

1950　仙台市に生まれる
1973　東京藝術大学美術学部卒後フランス、スペイン滞在
1975　イタリア・ローマにアトリエを構え、現在に至る
1976　ローマ国際オスカー展出品、絵画の部オスカー受賞
1978　ローマ国際アーティスト展銀賞受賞
1988　イタリア・フェラーラ近代美術館個展
1990　ローマナショナルライブラリーセンター個展（イタリア文化省主催）
1997　ヴェルシリア賞 1997年度グランプリ受賞〈彫刻、絵画〉（イタリア）
　　同受賞展・PAX2000世界巡回展開始（イタリア）
2000　「風の環-PAX2000-」カステル・ガンドルフォのローマ法王公邸内に史上初の抽象彫刻永久設置（バチカン市国）
2001　「風の環-PAX2001-」仙台国際センターに永久設置（宮城県仙台市）
2002　「シリーズ『記憶の壁』PAX2001-光の誕生-」ユネスコのパリ本部に永久設置（フランス）
2003　「風の環-PAX2003-」ピエトラサンタに永久設置（イタリア）
2006　「風の環-PAX2005-」仏教発祥の地ブッダガヤ《世界遺産》に永久設置（インド）
2008　「風の環-PAX2008-」ネイティブ・アメリカンの聖地ワイオミング州デビルズタワーナショナルモニュメント（アメリカ合衆国・国定公園）内に永久設置（アメリカ）
2009　国際天文学連合により小惑星6098が「MutoJunkyu」と命名される
2011　「風の環-N.Y.9.11慰霊モニュメント-」ニューヨーク市のジャパン・ソサエティーでプレビュー展示（アメリカ）
2012　COP3京都議定書15周年プロジェクト「光・水・風」国立京都国際会館庭園に21点の彫刻作品を展示（京都市）
　　同オープニングにて「東日本大震災3.11慰霊モニュメント 1/4ファーストイメージモデル」初披露
2017　フェラーリ創立70周年記念特別イベント〈イタリアの風〉（東京都）
2019　6月9日「昭島・昭和の森 武藤順九彫刻園」開園（東京都昭島市）
2020　3.11慰霊モニュメント 石巻国立慰霊公園（仮称）に設置予定（宮城県石巻市）

▶関連動画をYouTube「武藤順九」で検索
●武藤順九014／3.11風の環プロジェクト　●風の環3.11 東日本モニュメント活動　●武藤順九（1）　●武藤順九（2）　●3.11＆人と自然自然 悲しみと愛～武藤順九の宇宙～　●Junkyu Muto's Universe：3/11, Humans and Nature, Sorrow and Love（英語版・武藤順九の世界）

■書籍『風の環 武藤順九の宇宙』（神渡良平著／PHP研究所）
■書籍『いのちを彫る 風の環の哲学』（武藤順九著／PHP研究所）

■公式サイト 武藤順九の宇宙 http://www.junkyu.jp/
■お問い合わせ junkyumuto@gmail.com

作品「CIRCLE WIND（風の環）－PAX2000－」
（2000年、イタリア産大理石、台石は仙台・青葉城の石垣に使用されていた石）
バチカン市国のローマ法王公邸内に永久設置。抽象彫刻作品としては歴史上はじめてのこと

左：ローマ法王に謁見する武藤氏

私にとって大理石は、時空を超えて出会える生命体そのもの

――それまでに石を彫ることはありませんでしたか？

武藤　石は彫ってなかったな。粘土でつくる彫塑や、木を削って彫刻のようなものをつくったりはしていましたけど、本格的に石を彫るということはありませんでした。

やっぱり、石の美しさに魅せられたんでしょうね。それも大理石。私の場合はみかげ石ではなくて、大理石なんだな。

私は大理石を見ていると、生命の循環、つまり生命そのものを感じます。

花崗岩などはどろどろのマグマになって、いろいろなものがミックスされてできているから、金属みたいな印象があります。それに比べて大理石はマグマの近くで温められ、そのままゆっくり、億年単位の時間をかけて冷めて生成される。生命の堆積がその時間の流れのなかを眠ってきているわけだ。

だから、石のなかに「fossile」（化石）なども入っているんですね。ときには何億年前の水が内部に封じ込められていて、「それを見つけたらとてもラッキーなことがある」と、私たちの仲間ではいいますが、本当に時々出会うんですよ、何億年も前の水に（笑）。

つまり、私にとって大理石は、時空を超えて出会える生命体そのものなんだな。

彫刻にしても、「石彩」にしても、大理石を見ていると、その石が何億年も前に生まれた頃の宇宙や地球の風景って、どんなだったのかなと、イメージしながら楽しんでいるんです。石のなかに化石があれば、そのまま使いますが、それもまさに生命体の一つのかたちがそのままで石になって残っているから。私はそれを現代に彫刻として生かし、太古の風景を思い描きながら表現しているんです。

「素材に感じる」と、私はよくいいますが、木を彫る人は木から何かを感じて、木に呼ばれています。同じように、私は石に感じて、石に呼ばれているんです。それも大理石に。

だから、彫っていても、彫り進んでいくうちに自然とかたちが現れてくる。それは石そのものからイメージが出てくるからです。「石彩」にしても、石のほうから「こう描いて」といってくる。そういう石の呼び声を、私は聞いてあげているだけだからね。

造形表現をする人たちはみんな、同じようなことをいっていますね。ミケランジェロもそうですし、木彫でも同じで、日本では鎌倉時代に運慶、快慶などのすばらしい仏師がいましたが、彼らも「木に呼ばれる」というようなことをいっていますね。

ピエトラサンタの工房で大理石を彫る武藤氏
「私は石に感じて、石に呼ばれて彫っている。だから彫り進んでいくうちに自然とかたちが現れてくる。石の呼び声を聞いてあげているだけ」と話す

技術の習得などももちろん大切なことですが、最終的にはそういうものを超えて、魂の部分で素材とつながらないといい作品は生まれません。

それは石を扱うのであれば、〝石とつながる〟ということです。

「生命」が作品の核にある

――作品のテーマとして最も大切にされているのはどんなことですか？

武藤　それはやっぱり「生命」です。彫刻でも絵でも、テーマは「生命」。最もシンプルで、なおかつぶれないものですし、「生命」が宿っていない作品は世のなかに発表できません。

なぜなら感動を伴わないからです。それもその作品にまずは作者自身が感動しなければ、他人が感動することなんてあり得ません。もちろん好き嫌いはありますが、つくった本人がゾクゾクする感動を得なければ、作品として世のなかには出せない。

――先生は常にゾクゾクと？

武藤　もちろん、その連続だね。その感動を一度でも味わうと、またそれを味わいたくて追い求める。だから〝美の女神〟なんだよ（笑）。

それは素材である石でも同じで、ひと目見てゾクッとすることがありますね。

でもそういうことは、やはり長い経験のなかで培われるものでしょうね。私がヨーロッパに渡ったのが一九七三年だから、もうすぐ半世紀。年の功かな（笑）。

――私、七四年生まれです（笑）。

作品「CIRCLE WIND（風の環）－PAX2001－」
（2001年、イタリア産大理石）
仙台市・仙台国際センターに永久設置

武藤　そうか、ちょうど私が渡欧して間もなくキミが生まれたんだな（笑）。

私はイタリアの永久市民権も持っているので、日本人でありながらイタリア化、ヨーロッパ化するのが普通と考えられます。でもそうではなく、むしろ日本とか、イタリアとか、そういう国と国の水平レベルではなくて、それを超えた縦のレベルというか、「世界市民」みたいな感覚がとても必要だと思っています。私がテーマにする「生命」とか、自然、宇宙というものは、民族や宗教、政治、人種などを超え、人類共通の世界観ですから、そういうものがやはり作品の重要なキーワードになるでしょうね。

いままでバチカンやブッダガヤなど、世界中でいろいろな仕事をさせていただいたのも、やはり私の作品の一番根底の核には、すべての人たちが探し求める、平和や生命の尊厳というものがあるからだと思っています。それは私でいえば、「日本人」というアイデンティティを超えたところにあるものですね。

作品「CIRCLE WIND（風の環）－PAX2003－」
（2003年、イタリア産大理石）
イタリア・ピエトラサンタに永久設置

――でも、どこかに日本人的なものがあるのでしょうね？

武藤　それはあるだろうね。日本の文化を「抹香くさい」という人もいますし、そういうものをすべて取っ払おうと思っても、それはなかなかできませんよ。意識してなくても自然に出てきますね。自分の育った根っこだから、それはそれでいいでしょう。

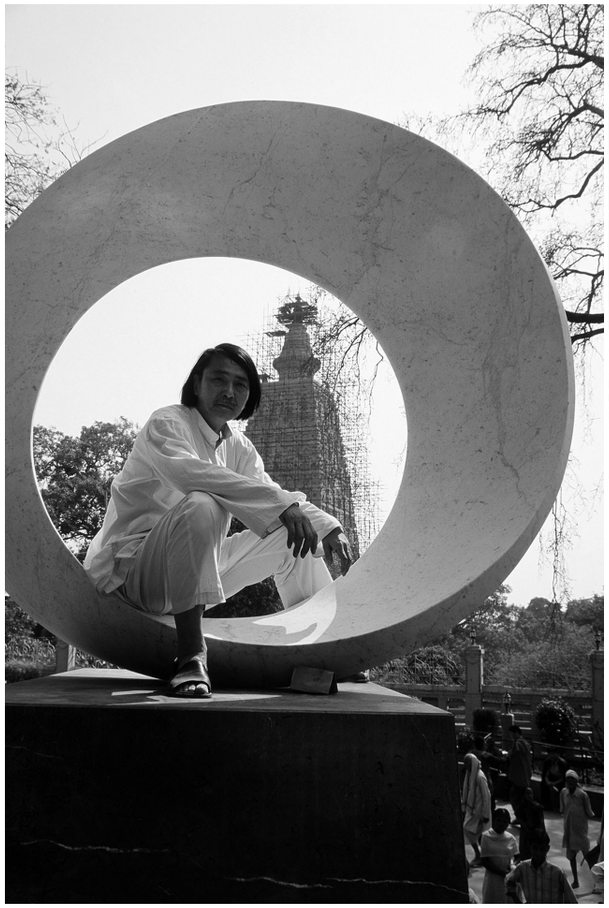
でもカッコつけて「日本人」「日本文化」というのは、もう勝手にやりなさいと。そういうことをいわなくても、作品が自ずと語るようにならないとだめでしょうな。

「アーティスト」は職業ではない。作品が評価されて得られる称号である

――美術の世界でも、イタリアと日本では違いますか？

武藤　違いますね。ヨーロッパ、特にイタリアは世界の文化の中心です。ローマの文明がそのほとんどの根底になっていますからね。

そしてそこではアートという大きな家、箱のなかに、たまたま絵を描く人がいて、石を彫る



作品「CIRCLE WIND（風の環）－PAX2005－」
（2006年、イタリア産大理石）
仏教発祥の地、インド・ブッダガヤのマハボディ大寺院（世界遺産）に永久設置

（左写真と同じ作品）

人がいる。ミケランジェロはどちらもやりましたけど、そこにみんなが納まって、そのなかで競っているから厳しいわけです。

でも日本の場合には、その大きな家をさらに細かく部屋割りしてしまって、そもそもの「芸術」という大きな枠組みすらも見えにくくなっていますね。それは自分たちでそうしているんでしょうな。いってみれば、職人組合でしょうか。つまり、冒頭でも触れましたが、芸術を仕事にしているんです。

でも、アートというのは本来、仕事ではないんですよ。アーティストというのは、職業の名前ではありません。

私が石の彫刻を始めた頃にある工房に行くと、職人さんに「キミはいままで石を彫ったことがないらしいが、どんな職業をしてきたんだ？」と聞かれました。それで私が「アイ・アム・アーティスト」と答えると、彼は不思議な顔をして、「キミのいうアーティストは意味が違う。ぼくはキミの職業を聞いているんだ」と。つまり「いままでどうやって食ってきたのか？」と聞いてくるんです。そして、こう続けました。

「アーティストというのは、ぼくらが決めることだ。キミ自身で決めることではない。キミの作品を見た人が、キミがアーティストかどうかを決める。だからキミは自分のことをアーティストとはいえないんだ」

アーティストとは、他人からいただく名称なんです。それも自身の作品が評価されて得られる称号なんです。彼のこの言葉は、私にとってはカウンターパンチでしたね。

イタリアには、石の世界でも職人さんがいっぱいいますよ。それも世界有数の技量を持って、世界中で仕事をしています。ただ、彼らは技術者なんですね。だから「すばらしいものをつくっているのに、なぜキミたちはアーティストといわれないのか？」と聞くと、「つくっているものを見ればわかるだろう。オレは職人であり、アーティストではない」と。

そのあたりの区別は、ヨーロッパでは非常にはっきりしていますね。でも日本では曖昧で、誰でもアーティストになってしまう。何にでもすぐに「アート」とつけたがるし、本人もすぐその気になっちゃうんだよな。

――本来はそういう厳しい環境のなかで認められなければいけないのでしょうね。

武藤　そうです。職人はまだ食べられますが、アーティストを志す人はとても厳しいですよ。

でも、みんな〝美の女神〟に恋をしているから、苦しくても続けているんです。私もいまはアーティストと呼んでいただいていますが、もともとは石屋ですからね。大理石の加工技術や

作品「シリーズ／記憶の壁　－生命のシンフォニー－」
（H.60×L.80㎝、ネオフレスコ、2017年、絵画作品）

作品「生命の歌」
（H.67.5×L.67.5㎝、2017年、墨絵作品）